

P. H. C. ローヴにおける欲求論

安田 尚

はじめに

フランスの社会学者 P. H. C. ローヴ (Paul-Henry Chombart de Lauwe) は、欲求論に系統的に取り組み貴重な成果を上げている。ローヴの場合、欲求概念の学説史的検討を踏まえるとともに、更に実証レベルにおけるこの概念の経験科学的有効性を検証しようとしている点に特徴がある。彼は、この概念が一般的に与える主観的、非合理的ニュアンスを排して、客観的な検討に耐え得る科学的概念としての欲求概念を形成しようと試みている。欲求に関連する諸概念（「欲望」、「必要」、「衝動」等）との区別のみならず、欲求概念の新たな分類と体系化をローヴは提起している。その際、彼は、この概念整理の作業と労働者の日常生活に関する調査の成果を結びつけ、欲求論を理論と実証のレベルで相即的に展開しようとする。とりわけ、彼の場合、悪しき意味での「実証」、つまり現状追認的、現象記述的な意味での「実証」を越えて、欲求を社会変動の重要な契機として位置づけている点が注目される。彼は、それを欲求における「限度 (seuil)」概念や「アスピレーション (aspiration)」概念の導入によって試みようとしている。

ところで、従来、社会科学における欲求論は、経済学の分野では、「賃金問題」や「貧困化論」において、その一契機として検討されてきた。つまり、賃金規定=労働力再生産費を構成する一要因として、あるいは、拡大された欲求とその不充足を新しい貧困化の一指標として扱う試みがなされて来た。しかし、経済学の分野では、欲求概念は、これら経済学の問題の外在的な一契機として

援用されたにすぎず、それ自体として欲求論が分析されることは、ほとんどなかったといえる。又哲学の分野では、ブタペスト学派のA. ヘラーのように「ラディカルな欲求」の形成とその大衆化に社会変革の契機を見出そうとする試みもなされて来た。だが、ヘラーの場合、「ラディカルな欲求」が、なぜ、どのように、どこまで形成されるかを科学的、理論的に解明する点で不充分であり、思弁的な形で、一つの希望として語られていたに止まると思われる¹⁾。

以上の点からすると、ローヴの研究は、1)欲求概念を科学的概念として彫琢しようとする点で、2)また、欲求論を歴史的、社会的展望に結びつけている点で、検討に値する業績である。更に、1)現代日本における労働者の諸欲求の处在及びその構造の解明と、2)そこに伏在するであろう諸矛盾の形態を展望しようとする筆者の問題意識に照らして、ローヴの研究は、何ほどの手がかりを与えてくれるものと思われる。

以下、本稿では、ローヴの欲求論を①彼の論文「利害関心と二重の意味での必然性としての欲求」(1975年)と、②彼の著作である『アスピレーションの社会学』(1971年)を中心に、紹介、検討を試みることにしたい。²⁾

一、欲求をめぐる諸学説

『パンセ』誌180号(1975年)の「欲求と消費(Besoins et consommation)」

1) Agnes Heller, ≪Theorie der Bedürfnisse bei Marx≫, V. S. A. Westberlin, 1976. 以前、筆者は、この書の批判的紹介を試み、次のように、指摘しておいた。「…『ラディカルな欲求』の具体的対象である『自由時間』、『普遍性』が、資本主義社会において形成されながら、そこでは十全には充足され得ないとする場合、その『境界』が、どこにあるのか説明されていない…。それは、量的に確定し得るのか、あるいは、何んらかの質的規定をなし得るのか、という問題である」。「ヘラーの場合、『ラディカルな欲求』の形成の分析において、この〔否定の否定の〕論理が論証の代用となっているのではあるまいか」。(『欲求の社会学論』、『社会学年報』, 9号, 1980年, P. 19)

2) Paul-Henry Chombart de Lauwe,

① “Les intérêts contre les besoins la double nécessité”. *La pensée*. No180, 1975.

② *Pour une Sociologie des Aspirations*. Éditions Denoël, 1971, 2^eéd., Paris.

特集号に寄せたローヴの論文「利害関心と二重の意味での必要性としての欲求」は、従来の「支配的な欲求概念は、支配集団によって規定され、搾取のあらゆる形態を可能にするものとなっている」、だが、この数年来こうした欲求概念は、正当にも批判の対象となるに至った、と述べている³⁾。しかし、ローヴに言わせれば、この批判たるや確たる基盤を欠いており、混乱しているので、周到な学説史的検討と概念整理を必要としているという。こうして、彼は、1)経済学と、2)マルクス主義における欲求概念の研究状況を概括する。まず、経済学の分野においては、欲求論は、対立する「二大潮流」で研究されて来たとする Destanne de Bernis (G) の説によりながら、次のように研究状況を整理している。すなわち、第一の潮流は、「欲求概念を個人の欲望や消費研究に帰着させるものであり」、セー、ベームーバベルク、サミュエルソン等がそれに当たるとされ、第二のそれは、「欲求概念を生産体系に依存させるものであり」、マルクス、リカードウ、A. マーシャル、ケインズに代表されるとする⁴⁾。そして「経済心理学」は、この第一の潮流の「罠 (pièges)」にかかっており、「生産における社会関係を抽象化し、かくして、支配階級の機能を助長することになっている」とする。更に、「経済社会学」は、彼らが「欲求の心理過程」を理解できないため、「混乱」と「イデオロギー抗争」に陥り、果ては、「欲求概念の一掃」を企て、「テクノクラートの社会計画」の思うままにされている、とする⁵⁾。以上の点からすると、ローヴは、欲求概念を「消費」の観点から問題とする潮流には、批判的であることがわかる。だが、第二の潮流については、何らコメントを加えていない。『パンセ』誌のローヴ以外の論者の多くが、「生産」の視点から欲求を論じているのとは、対照的であり、彼の欲求論の特質をなすものとして注目しておきたい。

更に、彼はマルクス主義における研究状況を二つの傾向に整理する。その一つの傾向は、マルクーゼ、H. ルフェーヴル、A. ゴルツに代表されるもので、

3) P. H. C. Lauwe, "Les intérêts contre les besoins la double nécessité". P. 122.

4) Ibid., P. 122~123.

5) Ibid., P. 123.

欲求をもっぱら「疎外論」,「物象化論 (reification)」,「ニセの欲求 (faux besoins)」の観点から批判することによって、「支配集団による搾取過程を暴露することに成功している」⁶⁾とされる。更にもう一つのそれは、アルチュセール派のマルクス主義であり、彼らは、『『ヒューマニズム』という魔女の追放』によって、「欲求とその対象の消滅と同時に、その主体の死」を主張している。しかし、この派の論者達は、「マルクスが、欲求を概念的に区別したことの重要性や、生産—消費関係をマルクスが中心的分析とした事を忘却している」⁷⁾と、ローヴは批判する。そして、彼は、経済学やマルクス主義の諸潮流の間での論争は、問題の处在を明らかにする点では意味があったとする。だが、彼らは、「異った多くの事柄」を欲求概念によって一括して論ずる誤りに陥っているのであり、欲求概念の整理が急務であるとする。

そこで、まずローヴは、欲求論の原流ともいべき1)、ヘーゲルと2)、マルクスについて粗描する。彼は、ヘーゲル欲求論の特質を欲求充足の相互補完性、体系性、相互依存性にあるとする。「ヘーゲルにとって、欲求、技術、労働は、個別的体系を構成し、それらの総体が有機体を形成している。この個別体系の総体〔有機体〕は、理論的、実践的文化を充足するよう調和を保っている。欲求の総体である人間は、それ自体、個別的目的であり、又自然的必然性と恣意的意志の混合物である」。⁸⁾つまり、ヘーゲルは、人間を個別的目的を追求する「欲求の総体」として、更に、人間は、有機体による文化の充足を享受する存在と捉えている、とするのである。こうして、ヘーゲルは、人間の体系への依存性という観点から欲求の問題を論ずる事になる。「何ものも孤立したものはない。エゴイストの目的でさえ、他者との関連なしには、達成し得ないのである。こうして、相互依存 (dépendance réciproque) の体系に基礎づけられた普遍性の原理 (=外的国家、欲求と悟性の国家) とヘーゲルが呼ぶものが現れる」⁹⁾(傍点引用者)。つまり、「市民の個別的利害は、普遍性を通じてのみ獲得

6) Ibid., P. 123.

7) Ibid., P. 123.

8) Ibid., P. 130.

9) Ibid., P. 130.

され得るのであり、『総体を構成する鎖の環に〔個別的利害が〕転化することによって〕〔のみ〕獲得されるのである』¹⁰⁾。こうして、市民社会においては、欲求充足における他者依存、体系への依存性が現れるのである。したがって、「市民社会の最初の契機は、欲求の調停である」。又、個人は、〔自らの〕欲求を労働によって充足すると同時に、他者の欲求の充足に参加〔寄与〕することになるのである¹¹⁾。かくして、「欲求の体系」が現れ、人間の欲求は、ますます「増大」「多様化」する。その結果、「社会の状態は、『欲求、技術、享受における無限の複雑化と個別化』へ向うことになる」¹²⁾。このように、欲求充足における相互補完性の拡大、深化につれて、「『主体の欲望 (appétit) は、全て他者の欲求 (besoins) 充足に貢献するものに転化する』」のであり、その際に、各個人が立ち向うことになる「必要性 (nécessité)〔必然性〕」は、この「錯綜性 (enchevêtrement complexe)」に起因するものであるが、それは、同時に各個人にとっては、「普遍的豊かさ」となるものである¹³⁾。ローヴは、以上のように、ヘーゲル欲求論の基本命題を粗描した上で、それを次のように評価する。ヘーゲルの欲求論の特質は、「欲求が社会生活の動因 (moteurs) になる」とする点にある。多くの研究者は、「基本的欲求」の設定から出発して、様々な欲求の一覧表を作ることに熱中するのを常としているが、「我々にとって重要なのは、欲求の運動、すなわち、社会生活における欲求の役割、欲求の

10) Ibid., P. 130. 尚、ここでのヘーゲルからの Louwe による引用は、『法の哲学』、§187に対応。ちなみに邦訳全文は以下のとおりである。「したがって普遍的なものは、諸個人には手段として現象するが、諸個人の目的は普遍的なものによって媒介されているから、彼らの目的が彼らによって達成され得るのは、ただ彼ら自身が彼らの知と意志のはたらきと行動とを普遍的な仕方と規定し、彼ら自身をこの関連の鎖の一環たらしめるかぎりにおいてだけである」(『世界の名著35』「ヘーゲル」藤野涉他訳、中央公論社、一九六七年、418—419 p)

11) Ibid., P. 130.

12) Ibid., P. 131. 同上。§195. 同邦訳全文。「もろもろの欲求や手段や享樂をとめどなく多様化し種別化する社会的趨勢には、自然的欲求と文化的欲求との差違と同じように、限界がない」。(同、p.426—427)

13) Ibid., P. 131. 同上。§199. 同邦訳全文。「労働と欲求の満足とが右のように依存的相互的であるところから、主観的利己心は、すべて他人の欲求を満足させるための寄与に転化する、——。」(同、p.429)

増大、欲求の多様化、欲求の葛藤なのである」¹⁴⁾とローヴは、主張する。以上見られたように、ローヴがヘーゲル欲求論において積極的に評価するものは、市民社会における欲求充足の相互補完性の主張であり、欲求の社会的諸関係に対する駆動的役割の評価であり、いわば「欲求の弁証法（体系的関連性と発展性）」の視点と言えよう。

では、ローヴは、マルクスの欲求論については、どのように把握し、評価するのであろうか。マルクスは、資本主義社会では、「欲求、必要性 (besoin, nécessité)」がエゴイストと化した個人に「つねに少しでもより多くのものを要求する (demander)」ように強制するという捉え方を提起した、とする。つまり、資本主義が人間の欲求に加える様々な歪みを捉えている点に、マルクス欲求論の特質を見ようというのである。更に、その特質として強調しているのは、マルクスが一貫して生産の視点から欲求の問題を捉えていた点である。つまり、マルクスは、「物的生活と生産の発展は、欲求の発展とその充足に結びついている」と把握しているとした上で、「だが、マルクスにとって、消費を伴う生産と生産を伴う消費との関係については、そこで優位を占めるのは、常に究極的には、生産の方である」¹⁵⁾とする。何故なら、マルクスは、「『生産は、欲求に対する素材を提供するのみならず、素材に対する欲求をも提供するのである』(『経済学批判序説』)、又「生産は、『主体にとっての対象のみならず、対象に対する主体をも生み出す』(『経済学・哲学手稿』)と述べているのだから。更に、マルクスの提起した社会主義の原理は、まさに、この欲求に基づいた社会の再組織が主張されていたとする。「ひとたび、資本主義的搾取を廃止した後には、革命的営為の全ては、『各人は、生産手段に応じて〔取る〕』を『各人はその欲求に応じて〔取る〕』という定式へ移行させることにある」とし、そうした社会においては、「生産手段は、労働者全体のものに属するであろうし、欲求の増大と個体化 (individualisation) は、無限に追求されるこ

14) Ibid., P. 131.

15) Ibid., P. 131.

とになろう」というのである¹⁶⁾。これに対して、資本主義社会では、労働者の労働は、強制労働となっており、「『それ〔労働〕は、欲求の充足ではなく、労働の外における欲求充足の手段である』」（『経済学・哲学手稿』）。つまり、資本主義における労働疎外に伴って、欲求の疎外も引き起されるとするのである。このように、マルクス欲求論は、「生産」、「労働」の視点から展開されるのであるが、欲求の分類においてもこの点は、貫かれている。つまり、「マルクスは、文明の発展段階に規定された、物的欲求、家族の欲求、教育欲求を分類し、それらを労働力の価値の評価から基礎づけている」¹⁷⁾。この分類において、ローヴが重視するのは、マルクスが、物的欲求、すなわち、労働能力の再生産（休息や食事）に加えて「労働力能の拡大（教育）」や「経済生活において増大する社会化（文明の所産への参加）」の欲求、いわゆる文化的欲求を強調していた点である。この文化的欲求をマルクス欲求論において重視していることは、後に見るローヴ自身の欲求概念との関連で注目しておきたい点である。ローヴにいわせれば、こうした多様な欲求を充足する手段が、貨幣によって担われることによって、「貨幣欲求は、資本主義経済によって引き起された〔それに最もふさわしい〕真正銘の欲求」となるのであり、従って「『貨幣の量がしだいに、人間の唯一の基本的な質となる』」（『経・哲手稿』）（傍点引用者）のである。こうして、貨幣の量が人間の質を規定するに至る資本主義社会は、「『粗野な欲求を人間的欲求に変えるすべを知らない』」（同上）とされる。ローヴは、この『経・哲手稿』における「粗野な欲求」、すなわち「マルクスが野獣化（bestialisation）と呼ぶもの」を「労働者の欲求を物質的生活の維持に還元すること」¹⁸⁾と解釈している。最後に、彼は、結論として、マルクス欲求論の現代的意義を次のように述べている。「いわゆる『消費社会』における欲求のアナーキズムの只中で、我々の時代の最低生活水準に関する議論に対して、この〔マルクスの〕指摘は、大きな現実性（actualité）を与えるものであ

16) Ibid., P. 131.

17) Ibid., P. 131.

18) Ibid., P. 132.

る」¹⁹⁾。すなわち、現代資本主義は、一方では「欲求のアナーキズム」とも呼ぶべき、欲求の無際限な多様化と増大をもたらすと伴に、他方では、人々、とりわけ労働者に対しては、その人間的欲求の充足どころか、物的な最低生活の維持さえ危機に陥れているとするのである。

以上見られたように、ローヴは、マルクスの欲求論は、生産—労働—労働力の価値、の視点から欲求を捉えているとした上で、資本主義社会は、人間の諸欲求を「欲求のアナーキズム」つまり、肥大化と「野獣化」つまり最低生活水準への抑制（「貧困化」）へと両極分化させるものとしている。その意味で、彼はマルクス欲求論を「欲求の疎外論」として捉えていると言えよう。

更に、ローヴは、ヘーゲルとマルクスの共通点は、欲求が社会生活において本質的な機能を果しているとする点にある、と言う。だが、この点では、機能主義も同じである。「マリノフスキーにとって、機能とは、『人類が、人工物を利用して協力し、財貨を消費する活動によって、欲求を充足することにある』」のであり、この機能の発揮すなわち「(有機的な)本質的欲求の充足は、新しい第二の、人工的環境の構築であり、新しい文化的欲求の出現を伴う」のである²⁰⁾。従って、これら機能主義者の欲求論においても社会生活における欲求の「本質的機能」が強調されるのである。すなわち、機能主義者は、「新しい欲求の創造なしには、発明も、革命も、社会的変化もない」と主張するのである。だが、マリノフスキーら機能主義者の「オプティミスト的展望」には、「欲求の疎外と操作」は、見逃されるのである²¹⁾。

以上要するにローヴは、欲求の社会における本質的役割をこれら諸学説の共通点として、確認しながら、ヘーゲルからは、1)「欲求の弁証法」、すなわち欲求充足における相互補完性、相互依存性と欲求の多様化と増大、マルクスからは、2)「欲求の疎外論」、すなわち、資本主義は、欲求充足の手段である貨幣の機能の自立化を促し、欲求の量化をもたらし、欲求の肥大化と貧困化を推

19) Ibid., P. 132.

20) Ibid., P. 132.

21) Ibid., P. 132.

し進める、という思想を評価、継承しようとするのである。これらの点は、彼の概念規定と方法に基礎理論として生かされていくのである。

二、ローヴにおける欲求概念

ローヴは、自らの欲求 (besoin) 概念を規定するにあたり、しばしば混同されている諸概念、すなわち欲望 (désir)、衝動 (pulsion)、本能 (instinct)、利害 (intérêt) と欲求概念を区別することを、第一に行わねばならないとする。ローヴは、欲求概念の基本的特質を次のように規定する。「欲求は、必要性 (nécessité) によって特質づけられる。しかも、この必要性は、二重の意味でそうなのである。すなわち、生命維持に不可欠〔死活的〕な必要性 (nécessité vital) と社会的義務 (obligation sociale) という特質である²²⁾。つまり、彼は、欲求を二重の意味での必要性と概念規定するのである。

更に、欲求の第二の特質が次のように語られる。「欲求〔の存在〕は、観察可能 (observable) なものである。何故なら、その欠如 (manque) は、明白な〔何んらかの〕結果を生み出すからである²³⁾ (傍点引用者)。この点はきわめて重要な指摘である。ローヴは、この点に関して、様々な実例を示す。生理的な実例でいえば、「睡眠不足」は、「心理的トラブル」を引き起し、又社会的な実例でいえば、「住宅不足」は、「社会的・心理的」に重大な結果をもたらさずには、おかないであろう。更に、病院、学校設備、文化施設、大都市の社会的連帯の「不在 (absence)」や「不充足」の結果も、その欲求の存在を逆の形で示す例であり、それ自体、社会学的研究が、暴露しなければならぬ課題になっていると指摘する。すなわち、生理的トラブル、病的症状が、生理的欲求の存在を表現すると同様に、様々な社会問題が、社会的欲求の存在を表現し、その観察を可能にするというのである。

そして、第三の特質として、この観察可能性の理論的根拠を与えるものとして、次の規定を提起する。「あらゆる言語において、欲求の概念は、対象の欠

22) Ibid., P. 124.

23) Ibid., P. 125.

如 (manque), 喪失 (privation), 不在 (absence) の概念に関連している²⁴⁾」のである。(傍点引用者) このように、欲求を対象の欠如としたことによって、「状態としての欲求」という次の規定が引き出されるのである。

すなわち、第四の特質として、「欲求は、実際に持っているものと、主体にとって、必要であるものとのギャップ (écart) によって引き起された一つの状態なのである」。従って、「対象の必要性 (nécessité) と有用性 (utilité) が欲求を特徴づけるものなのである²⁵⁾」。つまり、欲求とは、主体がその必要性と有用性故に、求める欠如した対象と現に持っているものとの間に生じるギャップなのであり、従って、欲求は、このギャップを埋めるべく感情・意志の反応を伴う活動を誘引することになるわけである。その意味で、欲求は、一つの状態なのである。この点と関連して、ローヴは、行動主義者の欲求概念を次のように批判する。欲求を行動主義のように、動機論の視点から用いると、欲求を「本能 (instinct)」や「有機的力 (force organisatrice)」と混同することになる。行動主義者は、動機を環境との関係、「刺激-反応」や「刺激-行動」図式に単純化する誤りに陥っている。確かに、行動主義者の主張するように、欲求は、有機体の内的衝動に結びついているが、同時に、欲求は、内的衝動の原因でもあり、結果でもある。例えば、「性的欲求においては、その傾向 (tendance) は、欲求にとって先在的であるが、外的対象もその欲求を呼び覚し得るのである」、又「飢えにおいては、食べる欲求は、不足に対応しており、主体をしてそれを埋めるため、外的対象を求めるよう強いるのである²⁶⁾」。要す

24) Ibid., P. 126. ローヴは、フランス語と他の言語との比較対照を以って例示しているので、若干、紹介しておく。フランス語における、besoin は、英語の、need と want の両方を含んでおり、更に、主体にとって、善きものを含意しているとす。つまり、besoin は、「必要性 (nécessité)」、「欠如 (manque)」と「善性 (bon)」を含んでいる、という。それに対して、désir は、英語の wish に、対応するという。独語については、フランス語の besoin に、対応するのは、die Nöt であり、util に対応するのが、die Notlich である。更に、l'état de besoin (「欲求の状態」) が、Bedarf に対応し、l'objet du besoin (「欲求の対象」) が、Bedürfnis である、とする。

25) Ibid., P. 127.

26) Ibid., P. 127.

るに、ローヴの行動主義批判は、「対象なしの欲求はない」ということである。欲求を動機論的に、つまり内的衝動（本能や有機的力）に還元するのは、欲求の対象性、つまり客観性を見落すことになるというわけである。このように、欲求の客観性を確定した上で、再度、第一の特質である、欲求における二重の必要性をその原因に即して、定義し直す。すなわち、「欲求の動因 (motivation) において、その要求 (exigence) が、自然や有機体の生活から生じた場合、それは必要性 (nécessité) である」し、「その要求が社会生活から生じた場合、それは、義務 (obligation) である²⁷⁾」。だが、この「必要性」と「義務」は混同されてはならないが、「しばしば、重なっている²⁸⁾」ことに注意せねばならないという。その単純な実例としては、食事があげられ、それは、生命を維持する不可欠なものという意味で「必要性」であるが、家族と食事を共にするという意味では、「義務」の性格を持つ。更に、複雑な事例として、賃金、すなわち労働力の再生産費の問題をあげている。それは、「必要性」という点では、1)「労働者にとって」、2)「社会にとって」その存在を維持する不可欠なものを意味し、「義務」という点では、1)「経営者にとって」法による規制という形で、2)「労働者にとっては」「子・親の養育」や「隣人とのつきあい」、「教育・文化・祭等」への参加という点で、「義務」的性格を帯びるというわけであり、この二重の「必要性」と「義務」の再生産費が賃金ということになる。しかし、これら各々の費用をどのように確定するかは、「人により、その利害集団によって、認識、評価、感じ方が異なる」という。まさに、この点をめぐる対立こそが「アスピレーション (aspiration) のダイナミズム研究の中心に位置するものである²⁹⁾」としている。(この点は、次節で検討)

かくして、ローヴは、欲求に関して次のような命題を提示する。「欲求は、必要性ないし、義務、あるいは同時に両者によって特徴づけられる」。(傍点引用者)つまり、1)「まず、必要性は、個人の生命維持的 (vital) な要求 (exi-

27) Ibid., P. 127.

28) Ibid., P. 127.

29) Ibid., P. 128.

gence) (= 空気, 水, 食物への欲求) となるだろう。この場合, 欠如 (manque) の状態は, それが伴う心理的結果によって, 外側から観察できる。場合によっては, 適切な道具によって記録された事実が検討される。この状態は, 主体によって感じ取られ, その感じのあるものは, 同じように測定される。更に, 「生命維持的な必要性に比して, 社会的義務は, ますます, その重要性を増している。この義務は, 社会と個人の関係, あるいは社会に固有のものとなり得る³⁰⁾。(傍点引用者) つまり, 何を義務とするかは, 個人と社会の関係によって, あるいは, 支配階級や権力集団の利害によって, 外的に与えられるというのである。この「社会的義務」を形成する媒介となるのが, 「イメージ, モデル, 表象 (représentation) や価値体系³¹⁾」といった精神的・文化的な「網の目」なのである。この点の解明に鍵を与えるのが, 「アスピレーション」概念というわけである。

とまれ, 以上見られたように, ローヴは, ①欲求を欠如 (manque) として規定することによって, その欠如の対象を客観的に確定し得るが故に, ②欲求を観察可能なものとして, ③その欠如を埋める運動, ダイナミズムを誘引する状態として, 更に, ④その対象が「必要性」か「義務」(社会的)かによって「二重の必要性 (広義の)」として, 規定するのである。

三, アスピレーションと社会変動

本節で紹介・検討を試みる『アスピレーションの社会学』³¹⁾は, 大きく二つの部分に分けることができる。その一つは, 主として理論的枠組の提示を行っている「第一部, 理論的諸原理」であり, 「第一章, 20世紀社会におけるアスピレーションと欲求の役割に関する仮説」, 「第二章, アスピレーション, 駆動

30) Ibid., P. 133.

31) P. H. C. Lauwe, *Pour une Sociologie des Aspirations*, 2^eéd., Paris, 1971. ちなみに言えば, 初版は, 1969年発行で, この二版(新版)では, 一部分(第六, 七, 八章)が, 削除されているが, 内容の実質的変更はない。ローヴは, 新版序文で, 「削除された章は, より専門化された形で, 再現されるであろう」とのべている。本書を構成する諸論文は, 初出一覧によれば, 最も古いものは, 1956年で, 大部分は, 1965~1969年のものである。

的イメージと社会変動」,「第三章, アスピレーションのダイナミズムと体制変動」,「第四章, アスピレーション, 要求 (revendication), 葛藤」によって構成されている。その二は、その個別的な実証による諸命題を提示している部分で、「第二部, アスピレーションと日常生活の変動」と「第三部, アスピレーション, 文化, 発展」によって構成されている。第二部と第三部は、ローヴが彼の研究チームと行った広範な社会調査、とりわけ『労働者家族の日常生活』(1956年)³²⁾が実証的データとして援用されている。

本節では、1)ローヴの問題意識、2)概念規定、3)仮説、の順に、とくに、アスピレーションと社会変動の関連に焦点を当てて、紹介・検討したい。

ローヴは、本書全体を貫く問題意識を次のように表明する。「この研究では、社会生活の細部から出発して、全社会的階級の表現である最深部の動機 (les motivations les plus profondes) を浮彫りにすること、〔更に〕社会がこの最深部の動機にどれだけ答え得るかを解明することが問題にされている³³⁾」。(傍点引用者)つまり、ローヴの基本的な問題関心は、諸階級の最深部にある動機、すなわち欲求とアスピレーションが何んであるか、又、社会は、これに答え得ているのかという点にある。そして、この問題意識は、「二十世紀社会は、欲求の進展 (évolution) と技術の進展との間にある、又人間のアスピレーションと自らのために建設される世界とのあいだにある、不調和の増大によって特徴づけられる³⁴⁾」という時代認識に裏づけられている。人々のいづく欲求、アスピレーションとこの社会が提供するものとの間の矛盾、軋轢こそ、ローヴの焦眉の問題なのであり、その解決の諸条件を理論と実証によって展望することに、本書の課題がある³⁵⁾。

こうした問題意識に導かれながら、ローヴは、研究課題を①個人・集団・社

32) P. H. C. Lauwe, *La vie quotidienne des familles ouvrières*, 1^{re}éd., 1956, 2^eéd., 1959, 3^eéd., 1977. C. N. R. S, Paris.

33) Lauwe, op. cit., 1971. P.9~10.

34) Ibid., P. 13.

35) この点、彼は、自らの調査における農民と技師の証言を引いている。ある農民は、子供の教育についてのインタビューに答えて、「我々にとっての心配事は、仕事に止まりたい〔農業を続けたい〕と思っている連中のことである。彼らを養成するに

会の欲求とは何か? ②我々の眼前で起きている技術的・経済的・社会的激動のもとで、その欲求は、どのように現れ、変更されるのか?、に設定する。とりわけ、彼が注目するのは、アスピレーションの役割である。このアスピレーションの問題こそ、この領域で古典的業績を上げたM・アルバックスが見落とし、機能主義者が誤った点だという。ローヴは、この課題を「様々な調査」によって、「アスピレーション、欲求の形成と作用過程の解明³⁶⁾」として追求したのであった。だが、更に研究を発展させるには、①概念、②仮説の明確化が必要であるとす。

そこで、まず①概念規定の問題であるが、ここでは、欲求とアスピレーション概念の区別と連関が問題とされる。まず、欲求とは、「客体的には、一つの必要不可欠な (indispensable) 外的要素に対応し、「主体的には、個人や集団が、この外的要素を欠いた時に引き起す緊張状態」を意味している、とされる。つまり、前者(客体的規定)は、「対象としての欲求」のことであり、その実例として、食物、社会的地位にふさわしいものとして義務的に必要となるもの(住居、衣服など)、社会においてある集団がその維持のため必要とされるもの(労働組合の権利擁護の体系、など)を上げている。後者(主体的規定)は、「状態としての欲求」のことであり、Murray の説に依りながら、「欲求とは、知覚、理性、努力、行為を存在状況を変えるよう組織する一つの力である³⁸⁾」としている。これに対して、「アスピレーションは、目的 (fin)、目標 (but)、対象 (objet)、に方向づけられた欲望 (désirs) に対応³⁹⁾」する、とされる。欲求が、何らかの強制的圧力(生命維持、社会的義務)によるもの

適した学校の少ないことである。[我々が] 考えているような学校は、まだできていない」と述べている。又、パリのある企業の技師は、「どんな大きな会社といえども、四十年以上も人を雇うことはない。だから、まだ完全に有能で、健康で、経験のある人達が、微笑し、悔恨の念を持ちながらも、きっぱりと、[定年] 解雇を受け入れているのだ」。(Ibid., P. 13)

36) Ibid., P. 15.

37) Ibid., P. 15.

38) Ibid., P. 16.

39) Ibid., P. 17.

であるのに対して、アスピレーションは、それからは、自由に解き放たれた一つの志向性を意味していると言えよう。バシュールの譬を引きながら、引きしぼられた弓の矢を押す圧力は、欲求であり、矢が速く前方に引きつけられた目標が、アスピレーションに当たっている。この点からして、欲求とアスピレーションは、しばしば混同されるが、「その起源 (origines) は、対立する二極において研究されねばならない⁴⁰⁾」のである。

続いて、彼は、相互に関連する四つの仮説を提起する。「1)アスピレーションと欲求の形成、2)経済的・社会的変動 (transformations) におけるアスピレーションの役割、3)個人的アスピレーションと集団的アスピレーションの関係、4)アスピレーションと欲求の相互作用⁴¹⁾」が、それである。第一の仮説においては、アスピレーションの形成は、その社会に固有な経済体制と文化によって形成される、とする。すなわち、それは、「技術的・経済的変動による歴史的進化に依存し」、同時に、人々の「社会構造や文化に対するイメージや表象 (representation)」に、又これらの変動に依存していると、される⁴²⁾。とりわけ、技術的・経済的変動で重視されるのは、「①都市化、②産業化、③情報化」の要因である。第二の仮説では、アスピレーションは、「社会変動において、アクティブな役割を果すもの」であり、その例証として「階級闘争において、アクティブな集団〔階級〕が持つ要求 (revendication) が、社会的大変動において決定的な影響を与える」場合がしばしばあったとされる⁴³⁾。従って、社会変動におけるアスピレーションの役割を研究する場合、「最も活発な (dynamiques) 集団の発見と観察が緊急な課題となる」のであり、「社会階級と民

40) Ibid., P. 17.

41) Ibid., P. 20.

42) Ibid., P. 21. 表象とイメージの区別については、別の箇所でも次のように述べている。「表象というのは、より合理的、論理的で洗練され、意識的なものである。これに対して、イメージは、強い感情的な色彩を持ち、不意に湧き出るものであり、…そこでは、無意識が重要な役割を果している」。更に、「イメージは、しだいに、活動的な力 (force active) を持つようになり、行動を導く、駆動的イメージ (image-guide) となる。その時、それ〔イメージ〕は、新しいモデルの形成となる」。(傍点引用者) (Ibid., P. 44)

43) Ibid., P. 27.

族集団は、いうまでもなく、政党、労働組合、年令階層、職能集団、経営者団体、文化団体は、それらが表明するアスピレーションとの関連で、特別に独自の役割を果し得るのである。これら諸集団の表明するアスピレーション相互の葛藤は、社会変動の重要な契機となる。そして、この葛藤の過程を通して、アスピレーションは、「要求 (revendication)」へと移行し、新たな社会構造、体制が形成されていくのである。かくして、個人的、集団的アスピレーションが、国家レベルの「決定において考慮される場合、その権力は、民主的タイプ」とされ、それが「表明されることができず、一階級やカーストの特権を維持するために、アスピレーションが、体系的に抑圧される場合、それは、独裁的タイプ」の権力ということになるのである⁴⁴⁾。この点、彼の問題意識との関連で、特に注目しておきたい仮説である。更に、第三の仮説では、個人的アスピレーションは、絶えず、集団的アスピレーションと一致と対立・乖離の過程にあるものとされ、アスピレーションは、個人と集団、及び個人と社会の関係の「結節点 (noeud)」であると位置づけられる。その意味で、個人的アスピレーションは、「社会によって提示された可能性、利害と結びつけて」研究されねばならないとされる⁴⁵⁾。第四の仮説では、アスピレーションの欲求（二重の意味での必要性）への転化と、アスピレーションの先導的役割が提起される。すなわち、「アスピレーションとしての欲求は、多かれ少かれ、近い将来において満足できるものに、又多かれ少かれ、個人の現在の状況を引き上げることを可能にするものに対応している」。そして、「アスピレーションとしての欲求は、少しずつ、義務としての欲求〔いわゆる欲求〕に変わる。だが、義務としての欲求が確定するや否や、それは、新たな同じ過程を開始させる新しいアスピレーションの獲得によって乗り越えられる傾向を持つ⁴⁶⁾」。この点は、ローヴが、アルバックスの古典的業績を乗り越える新たな貢献と自負するものである⁴⁷⁾。

44) Ibid., P. 27~28.

45) Ibid., P. 29.

46) Ibid., P. 25.

47) Ibid., P. 25. 「アルバックスは、既に、経済的な好況、停滞、不況の時期と結合させて、欲求の獲得、定着の過程に充分な注意を払っていた。だが、アスピレ-

かくして、彼は、これら四つの仮説を論証すべく、各論を展開していくのだが、ここでは、とくに第二仮説「経済的・社会的変動におけるアスピレーションの役割」を中心に見ておくことにしよう。

アスピレーションの形成は、何に起因するのか、又それはどのように社会変動に影響を与えるのか、これが問題の焦点である。論点が本書全体に拡散し、重複、錯綜しているので、その論理の筋道を捉えるのが困難ではあるが、あえて筆者なりにその論理を辿れば以下の通りである。1)、まず、第一の前提条件は、技術的・経済的・社会的条件の変化(「都市化」,「産業化」,「情報化」など)が、人々の様々な生活欲求(食事,住居,都市空間など)に影響を与えることである。2)、この変化が、人々の「生活水準」の「限度(seuil)〔識閾〕」を越える余力を与える場合、この「好条件(conditions favorables)」の下で、人々は、「義務としての欲求」(「固定観念(préoccupation)»)から解放され、「アスピレーションとしての欲求」(「自由な関心(intérêt libre)»)を形成するに至る。3)、個人・集団・社会の各々のレベルと、各レベル間での「アスピレーション葛藤」(批判的彫琢)を経由して、アスピレーションは、「欲求」(二重の意味での必要性)として、確定され、「要求(revendication)」となる。4)、この「欲求」,「要求」が社会及び国家レベルで「決定」に干与、影響を与える限りにおいて、アスピレーションは、「社会変動(transformations sociales)」を引き起すことになる、というわけである⁴⁸⁾。

このアスピレーション形成の起因に関しては、経済的・社会的変動に加えて、精神的・文化的要因が重視されている。これは、経済的・社会的変動による「自由な関心」の解放によって促進されるものであり、その意味で独立した要因ではなく、第一のそれに連関、依存している。だが、ローヴの場合、それは、とりわけ重要な役割をアスピレーション形成において与えられている。それは、いわば、①「世界観(conception du monde)」的要因と、②「精神的・文化的欲求」とによって構成されている。「世界観」的要因としては、「表象(repré-

ションには、注目していないため、その分析をまことに不完全なものとしている。」
48) Ibid., P. 37, 46, 57, 62, 74, 92.

sentation)」、「イメージ」、「モデル」があり、「精神的・文化的欲求」としては、「欲望 (désire)」、「希望 (espoir)」、「期待 (espérance)」があげられる。①と②は、相互に関連しながら、アスピレーション形成を促進する精神的・文化的要因であり、①は、いわば、情報空間を提供し、②は、主体との精神的距離、ギャップによって、「運動」を引き越すエネルギー源、「力」を与えるものといえよう⁴⁹⁾。

以上見られたように、ローヴは、アスピレーションと社会変動の関連を把握するわけだが、最後に、この論理における戦略的な論点を検討しておこう。その一つは、アスピレーションの相対的自立性の問題であり、その二つは、それと関連した生活水準における「限度 (seuil)」概念の問題である。第一の論点に関して、彼は、次のように主張する。アスピレーションは、経済的・社会的変動によって形成される。だが、同時に、アスピレーションは、「この変動を引き起し、あるいは、この変動に、人民の利益により適合的な一つの方向を与えることもできる」のである。その意味からすれば、「一社会の人間の欲望や希望の総和は、起爆装置ともなり得るし、又最も爆発的な変化の原動力の一つとして貢献し得るのではあるまいか⁵⁰⁾」、というのである。これに対して、「社会主義の教義、とりわけマルキシストのそれは、この問題を無視しているわけではないものの、経済的要因に与えている重要性に比較して、アスピレーションには、不十分な地位を与えているにすぎない⁵¹⁾」のである。このように、ローヴは、アスピレーションの独自の役割を強調するのである。したがって、「とりわけ、アスピレーションが実現されず、長い間蓄積された場合、それは、革

49) Ibid., P. 35~36. ここで、ローヴは、②について、次のように概念規定を行っている。「欲望とは、持っていない対象へ向う存在の運動であり、又、持っているものの維持や発展の運動である」。

「希望とは、より重要な変化への期待、より大きな価値を与える状態への期待、自分、あるいは自分の属している集団にとって新しい状況の実現への期待である」。「幻滅や空しい希望や失敗にもかかわらず、生きる理由 (raison) を保持する、全存在の世界観的態度に対応するのが期待である」。(傍点引用者)

50) Ibid., P. 34.

51) Ibid., P. 34.

命の原動力 (le moteur des révolutions) となる」のである。更に、この主張は、暗に、いわゆる「窮乏化革命論」を批判するが如く、次のように展開される。「確かに、充足されない物質的欲求は、本質的役割を持つが、はなはだしい極貧困は、成功した本当の革命においては、ほとんど見られない」のである。それは、しばしば「束の間の自然発生的な反抗を引き起す」にすぎない。「反対に、従属的階級の一部が圧迫されることが少ないなら、彼らは、潜在的アスピレーションの意識を獲得するし、アスピレーションを革命の原則 (doctrine révolutionnaire) に仕立てる」ことができるのである⁵²⁾。(傍点引用者)つまり、ローヴの場合、通俗的見解とは異なり、経済的貧困による窮迫した悪条件の下ではなく、むしろ、恵まれた条件の下でこそ (「一定の有利な条件 (certaines conditions favorables)」)、潜在的アスピレーションは、解放され、革命の起爆力の役割を果し得るというのである。これは、直ちに、第二の論点、「限度」の問題に関連していく。

この生活水準における「限度」の確定について、ローヴは、労働者家族についての克明な調査に実証的根拠を置いている。一国の経済的条件に規定されて、「生活水準の一般的限度」が規定し得る。それは、フランスにおける労働者家族の「物質的生活の細部にわたる個別の限度」を①家計、②住居、③食事、について調査、検討した結果、実証されたものである。家計においては、ある収入総額以下では、合理的生活は、不可能であること、住居に関する行動とアスピレーションは、最低限度 (①生存を維持する点、②フランスにふさわしい (équilibre) [社会的義務]) から出発しており、食事についても、消費量の詳細な研究によって、様々な食料には、限度のあることが明らかにされた⁵³⁾。

52) Ibid., P. 34~35.

53) Ibid., P. 107~108. ちなみに、食料消費の事例をあげておく。肉の場合、一日当り、50g、一週間当り、6~7回の摂取では、不満足「限度」となり、同じく、140g、8~10回で、満足とされる。(Ibid., P. 108) 更に、ローヴは、この生理的、肉体的必要「限度」に加えて、「良好な社会参加」や「合理的希望」を社会的必要「限度」としている。(Ibid., P. 109) もちろん、後者の社会的必要「限度」の確定こそが重要な問題といわねばならないが、ローヴは、このほかには、残念ながらほとんど展開していない。

これらの限度は、一定時点における、ある条件下の、社会や社会集団に関してのみ規定し得るものであり、更に、それは、①経済的条件や②社会構造の変化によって絶えず変動するものとされる。そして、ある家族の生活水準が、この「限度」以下の場合、その行動は、「固定観念 (préoccupation)」「心配」「不安」に囚われたものとなり、これに対して、この「限度」以上の場合、それは、「自由な関心 (intérêt libre)」によって活気づけられ、それは、「選択」の自由を獲得し、「アスピレーション」が形成されるに至る。つまり、欲求は、この「限度」を分岐点として「固定観念〔心配〕」を形成する「義務としての欲求」(二節で述べた「二重の必要性としての欲求」に対応)と、「自由な関心」によって引き起される「アスピレーションとしての欲求」に分かたれるのである。そして、まさにこうして形成されたアスピレーションが、「アスピレーション葛藤」を経て、「要求」となり、社会変動を引き起すに至るのである。したがって、第一の論点との関連でいえば、貧困な状態ではなく、豊かな状態、「経済的・文化的・社会的に有利な状態⁵⁴⁾」においてこそ、アスピレーションは、形成され、社会変動が引き起されることになるわけである。

おわりに

以上見られたように、ローヴは、学説史的には、ヘーゲルの「欲求の弁証法」(欲求の多様化、増大、欲求の相互補完性、「アスピレーション葛藤」=市民社会における「欲求の体系」)やマルクスの「欲求の疎外論」(権力による欲求操作や、「欲求の野獣化」「欲求のアナーキズム」の批判)を継承しつつ、欲求の社会的機能、とりわけ、その変革機能を重視し、その展開を試みていると思われる。又、その概念規定の点では、その科学的概念としての彫琢を目指して、「欠如 (manque)としての欲求」概念を基軸に据えて、新たな分類と体系化を試みていると言えよう。更に、社会体制と人民の欲求の矛盾という問題意識に導かれながら、アスピレーションと社会変動の連関を「限度」概念の設定によって、解明しようとしている。

54) Ibid., P. 202.

ローヴの欲求論の全体を貫く視点・方法において、積極的に評価し得る点は、①、まず、欲求の問題を理論と実証の両面から解明しようとしている点であり、②更に、変革の視点、人民の欲求の視点から、市場の論理（操作された欲求、「需要としての要求」）を批判している点である。（これは、「消費の視点」からの欲求論の批判やテクノクラートによる「社会計画」の批判に現れている）又、その研究領域、対象について言えば、①具体的で多様な生活欲求の研究に道を拓いている点（住居、食事、家計、都市問題、等）、更に、②アスピレーション形成の重要な要因として、「精神的・文化的要因」（表象、イメージ、モデル、欲望、希望、期待）に注意を払っている点が評価されよう。

だが、その問題点としては、「生産の視点」を軽視する点から来る問題がある。つまり、①経済的（社会的、文化的）に有利な条件においてのみ、アスピレーションが形成され、社会変動をもたらすとする命題は、結局、経済的に不利な条件の下では、社会変動の可能性はないということになるわけである。ローヴが、こうした見解を持つに至ったのは、彼が「生産の視点」を退けることによって、経済的条件を常に外在的な与件としてしまったからに他ならない。従って、そこでは、「労働運動」の役割は、「せいぜい、労働力の再生産費に必要なミニマムや既得の社会的条件を擁護するのを可能にするかもしれない⁵⁵⁾」とその現状維持的機能が評価されるに止まるのである。②だから、この経済的与件それ自体に、影響を与え得る労働過程における「労働能力の発展欲求」やそこに起点をおく「労働者の人格的な全面発達欲求」等は、問題とされることがない。この点は、彼の「生活欲求」研究にある種の狭さを与えていると思われる。

だが、非マルキストであるローヴの問題提起は、従来のマルキスト達の危機論的アプローチ、即ち経済的諸矛盾の蓄積による体制危機の状況下でこそ、変革の契機が形成されるという視点に対して、いわば常態論的アプローチ、即ち、むしろ経済的に安定し、有利な条件でこそ、その契機は、形成されるとする点にある。端的に言えば、ローヴは、欲求（「二重の必要性（必然性）としての欲求」）からではなく、そこから解放されたアスピレーションにおいてこそ、

55) Lauwe., op. cit., 1975, P. 139.

変革の契機は、形成されると主張しているわけである。

しかし、これは、穿った見方かもしれないが、彼の欲求概念の中軸＝「欠如としての欲求」の視点からすれば、生理的欲求の場合、何んらかの「心理的トラブル」が、その対象の必要性を客観的に表現していたように、労働運動や政治運動は、いわば「社会的トラブル」としての役割を果たすことによって、その目指す対象の欠如を、従ってその必要性を予示しているのではあるまいか。その意味で、こうした領域も又、欲求論において、正当な地位を与えられねばならないのでは、あるまいか。この点、別稿を以って、検討を加えたい課題である。